

No 127

ユキホオジロ

¹常家傳・¹盧文喜・²劉家琪¹東北林学院野生動物系・²黒龍江省博物館

訳 福井和二

我が国のユキホオジロに関する研究は、かつて、La Touche, J. D. D. (1925~1930), 寿振黄 (1936) 等の報告があるが、いずれも指名亜種 (*Plectrophenax nivalis nivalis*) についてである。La Toucheはただ1羽の雄鳥の標本(1913, 2, 23, 秦皇島)について、寿振黄は(1936年に)ユキホオジロを見ることなく《華東鳥類手冊》(La Touche, J. D. D., 1925~1930. A Handbook of the Birds of Eastern China) とブリテン博物館の《鳥類目録》(Sharpe, 1888. The Catalogue of Birds Brit, Mus., XII, pp.574-5750)により記述された。これらと、われわれが一部の地方で採取した10余羽の標本と符合しない部分がある。

《中国鳥類分布名録》(鄭作新, 1976)と《古北区鳥類名録》(Usurie, C. 1959. The Birds of the Palearctic Fauna)によると、中国東北部で見ることが出来るユキホオジロは北方亜種 (*Plectrophenax nivalis vlasowae*) であり、日本のユキホオジロも同亜種である(小林桂助, 1980)。ただ反対に《ソ連鳥類》(Dementieff, G. P., 1970. Birds of the Soviet, Union)の記載だけは違っており、さらなる研究が待たれる。

雪鷗(ユキホオジロ)は雪雀とも言い、羽色は白、黒2色で、ホオジロ属の中では比較的大きく、内蒙古自治区の呼倫貝爾草原で越冬する冬鳥で、この地方では優勢種で、他の越冬鳥類に比べて最も多い。大興安嶺森林にも分布し、東北学院には烏爾旗漢林業局の興安里林場で採集された1羽の標本がある。

1983年1月と1984年2月、筆者らは2回にわたり額爾古納右旗上庫力農場で野外観察と標本の採取を行なったので、以下のように報告する。

形態記述(冬羽)；羽色は白、黒、薄墨色の三色、尖った翼端、尾羽の先端は凹型。雄の上体、頭、頸、腰、上尾筒、尾羽外側3対は白色(尾羽外側末端に線状の黒斑)がある。上背、下背、肩羽と1~2対の長い上尾筒は黒色。少数の個体の下背に白色のものがある。尾羽中央の3対は黒色で、その外側1対の基部あるいは、大部分が白色である。翼は三列風切羽と大雨覆、2枚の小翼羽と外側7枚の初列風切羽の先端部の黒色を除き、すべて白色である(初列風切第8枚目には末端部に線状の黒斑がある)。翼を広げると黒い部分より白い部分が多い。通常黒色の羽毛は、いずれも羽縁に不均一な幅の白色のふちどりがあ(ときには小翼羽に例外がある)。上体の羽端は褐色を帯びた灰色に染まり、黒色、灰褐色の羽の羽縁には白色斑がある。下体は胸部(胸臑)の灰褐色横斑を除き全部白色。翼下面の大部分は白色で、翼先端部分がはっきりとした灰黒色。尾羽3対の黒色羽の下面も灰黒色である。

雌の上体の灰褐色は雄に比較して濃厚で範囲が広い。初列雨覆の大部分、大雨覆の外こう基部、中雨覆の基半分と小雨覆全体に黒色、初列風切の内側2枚末端に黒色斑があり、次列風切羽3~4枚と次列風切の羽の外こう末端に黒色の条斑があり、外から内側に向かって次第に小さくなっている。すべての翼上面の白斑は明かに雄よりも小さい。体の黒色羽は灰黒色で、翼、尾の羽軸部分の黒色は雄に比較して浅く淡い、羽毛の下面はさらに顕著で、灰褐色を呈するものもある。腰の羽斑は複雑だが白色ではない。

初列風切の外側第1あるいは第2羽が最も長く、第4の羽は前3枚に比べ顕著に短い。

嘴の形状は他のホオジロ属と似ており、咬縁部の中ほどに間隙がありしっかりと咬合せず、上

嘴の厚みは下嘴に比べ劣る。嘴は暗黄色、先端が褐色に染まる。脚はすべて黒色で、後指はやや長く、爪が湾曲している。虹膜は褐色である。

体位測定単位 g.mm

性別	体重	体長	嘴峰	翼長	尾長	ふ跗
♂	37.8	172.9	10.1	111.0	68.9	21.0
(8)	(35-40)	(160-185)	(9-11)	(100-116)	(55-75)	(20.5-22)
♀	24.5	162.5	8.5	107.6	68.0	21.5
(2)	(34-35)	(155-170)	(9-10)	(105-110)		(21-22)

生活習性

冬期のユキホオジロは好んで群れを作り、通常10~20羽ほどの群れで行動する。筆者はかつて数百羽の大群を見たことがある。よく道路上で採食しているのを見かける。警戒心が強く、頻繁に飛び立ったり降りたりし、その度に数十mないし数百mを移動し、ひとところに留まらない。人が接近するとすぐに飛び立ち、何回か繰り返したのち通り過ぎると、もとの所へ戻って採食をする。群れは安定せず大きな群れを作ることもあるが、幾つかの群れに分かれて行動することもある。地上十数mないし数十mの高さに飛び立ち、空中で鋭く短い鳴き声で鳴く。また、多くの人が家畜小屋付近で、地上に降りて採食したり、あるいは柵の上で休息しているのを見かける。さらに凍り付いた河川敷の上空を飛び、柳の林で休息しているのを見ることが多い。かつて、河川敷に群生した柳の上空を群飛していたユキホオジロの1羽が落鳥し、もがいているとき、多くの同じユキホオジロがしきりに鳴きながら、上空を旋回するのを見たが、群れに執着する習性が強いことを説明している。

ときたま、開けた所の樹上や、廂屋の屋根、畜舎の柵などで1~2羽が単独で十数分動かないまま止まっているのを見ることが、電線に止まっているのを見たことがない。通常他種と昆群を作ることはないが、たまにスズメと共に柵の上に並ぶことがあり、かつて、麦打ち場でホオジロと群飛するのを見たことがある。

日の出前の早朝から日没までいつでもユキホオジロが採食しているのを見ることができ、2月18~20日3回の夜明けの観察で、1回だけ7:05(日の出前東方が赤くなる頃)から7:25までに3回ユキホオジロの群飛を見た(スズメは6:20頃から活動を始める)。通常は夜明け8:00以後から日没前の4:30頃まで活動している。

ユキホオジロの越冬個体数は年によって大きな変動がある。たとえば、1983年1月上庫力農場7隊の牧野で数十羽のユキホオジロを観察したが、1984年2月には1羽も見ることができなかった。これは、この年の降雪が非常に少なかったことと関わりがあると思われる。

1983年2月7日午前、筆者はラ布達林から海拉尔までの砂利道130kmを2時間10分かけて走行中、道路上に8群のユキホオジロを観察した。最大約100羽の2群と、数羽から20羽の群れ全てを合計すると280羽となり、2.1羽/kmを見たことになった。

そ嚢と筋胃の剖検によると、ユキホオジロの食物は燕麦が主(馬糞中の未消化燕麦)で、その他アカザ、ヒエ、エノコログサ、レンリソウ、タデ科植物等の雑草種子であった。なお1羽のそ嚢中にメイガの幼虫1匹が見られ、これはトウモロコシの枯れ茎で越冬しているトウモロコシメイガの幼虫と思われる。このほか筋胃には多くの砂粒が含まれており、その湿重量は胃内容の半分を占めていた。これらの砂粒は直径1~2mmで角がとれ、まるくなっており、長く胃中に留まっていたものと思われる。

翼羽の先端が損傷した状態から数カ月は籠で飼育されたと思われる2羽のユキホオジロの食物

嗜好は、麦粒よりはるかに好んで粟を食した。水の飲み方はニワトリと同様である。活発に活動し、容易に飼育でき、その姿は美しく趣があり、飼い鳥として高い価値を有する。